

# 主人の沈黙、女中の咲笑

『ごった煮』におけるブルジョワの私生活

寺嶋 美雪

## はじめに

エミール・ゾラの『ルーゴン=マッカール叢書』(1871-1893) 第10巻『ごった煮』(1882)と、第11巻『ボヌール・デ・ダム百貨店』(1883)には、オクターヴ・ムーレという主要人物が連続して登場する。叢書の折り返しに当たる両作品は、どちらもパリのブルジョワ社会を舞台とし、明らかに連作として構想されている。『ごった煮』においてももうひとつ特徴的な点は、ルーゴン=マッカール一族出身のムーレに焦点を絞らず、ブルジョワの群像劇という体裁を取っていることである。『ごった煮』の冒頭で、エクサン・プロヴァンスから商売の野心を抱いて上京したオクターヴ青年は、ブルジョワ家族の住むアパルトマンに入居し、人妻たちとの不倫や女中の噂話を通して、中産階級の虚実をつぶさに観察し体験する。ブルジョワたちが繰り広げる悲喜劇は、オクターヴが続く『ボヌール・デ・ダム百貨店』で、女性の欲望を原動力に動く巨大なデパートという装置を築くまでの序章として位置づけられる。

しかし、『居酒屋』(1877)で描かれた労働者の悲惨、『ナナ』(1880)における上流社会の享楽と退廃といった極端な世界観と比べると、『ごった煮』は作中に満ちる痛烈な風刺ゆえに批判を浴びたものの<sup>1</sup>、主題のインパクトという点ではやや分が悪い。また序盤からブルジョワたちが入り乱れて登場するため、主人公の視点から語られる部分が相対的に少ないほか、各章で異なる

<sup>1</sup> 1882年1月5日より『ル・ゴローワ』紙に連載された『ごった煮』には、デュヴェルディという不甲斐ない裁判官が登場するが、これによりゾラは実在する同名の弁護士から名誉毀損で訴えられた。デュヴェルディの訴訟に乗じて作品の不道徳性をなじる世評の攻撃に対し、ゾラはエリー・ド・シオン編集長に宛てた手紙の中で、次のように作家の意図を主張し反論している。「では結論を申しませう。私が『ごった煮』の中で、道徳的な意図を込めずに書いた部分は1ページ、いや1行たりともありません。確かに生々しい作品ではありますが、それ以上に語の正統かつ哲学的な意味において、道徳的作品なのです。」それでもゾラは、出版時に人物名を修正した。(Lettre d'Émile Zola à Élie de Cyon du 9 février 1882, *Correspondance*, édition commentée et annotée, sous la direction de Bard H. Bakkar, Montréal, Presses de l'Université de Montréal et Paris, Edition du CNRS, t. IV, 1983, p. 276.)

人物の短いエピソードが次々に展開する反面、個々の人物像の掘り下げや心理描写は明らかに弱く、ドラマの核心が見えにくいという誇りは免れない。

こうした構成上の弱点を抱えてはいるが、『ごった煮』には『ボヌール・デ・ダム百貨店』の前史には留まらない、ゾラの後期作品で展開されるいくつかの重要なライトモチーフが反復されている。そのもっとも注目すべき独自性は、『ごった煮』以前の作品でも断片的に描かれてきた、19世紀後半における一般的な「私生活」を構成するほぼすべての要素が盛り込まれている点にある。そして、一見脇役に過ぎないようだが、実はブルジョワたちと同じ数だけ作中に登場する女中たちの存在が、このテーマを解読する重要な鍵となる。各章では、召使の忍び笑いやお喋りが、主人の背後でつねに通奏低音のように響いており、視点の複数化を意図した群像劇の効果を高めているのだ。本論では、『ごった煮』の女中たち、とりわけ物語の終盤で意外な行動に及ぶラシェルとアデルの造形を通して、19世紀特有の主人と召使の関係や、複数の視点が混在するブルジョワの「私生活」の雑居性について考察する。

### 1. 19世紀における「私生活」の発展

「かくまで社会史学者の熱い関心を惹き付けてやまないどんな魅力が、女中にはあるのだろうか<sup>2</sup>？」アラン・コルバンは、19世紀社会を論じたエッセイの中でこのような問いを立てている。確かに、長らく歴史の陰で沈黙してきたマージナルな存在であるがゆえに、とりわけアナール派の歴史学研究において、いわば「台所の社会学」を形成する召使階級は特別な関心の対象であり、その日常生活や厳しい労働環境についても詳細な研究がなされている<sup>3</sup>。20世紀初頭の台所の改良や電化製品の出現に伴って、主婦自ら家事をこなし始めると、一般家庭の構成員としての召使はほぼ消滅してしまう。しかし19世紀末までの西欧文学において、召使は頻繁に登場する脇役であり、主人を手玉に取る機知に富んだ従僕や、素朴で忠実な女中などの典型が数多く存在する。しかしある種の好奇と憧憬を掻き立てる特異な階級であるにもかかわらず、文学作品における召使の造形を論じた研究は現状ではきわめて少ない<sup>4</sup>。

<sup>2</sup> Alain Corbin, *Le Temps, le désir et l'horreur. Essais sur le XIX<sup>e</sup> siècle*, Flammarion, 1991, p. 81.

<sup>3</sup> ゾラが描いた19世紀後半の召使の生活実態については、ギイ・チュイリエとピエール・ギラルの共著に詳しい。Cf., Pierre Guiral et Guy Thuillier, *La Vie quotidienne des domestiques en France au XIX<sup>e</sup> siècle*, Hachette, 1978.

<sup>4</sup> ゾラの『ごった煮』を含めた19世紀自然主義小説の女中像に関する比較考察につい

そこで本章では、近代フランスにおける「私生活」の概念の変遷をなぞることで、19世紀小説において召使階級、特に女中たちが文学者の強い関心を惹くようになった背景を確認したい。

フランス革命前後の社会には一口に召使と言っても、従僕、御者、門番、小間使い、乳母や料理女など、もはや現代にはない細かい序列がある。貴族の日常生活でプライベートの観念は希薄であり、男性の従僕の前での貴婦人の入浴さえ珍しくなかった。階級社会においては、居並ぶ召使や豪華な仕着せは、経済力をアピールする家具調度と同程度に考えられていたのだ。ルイ＝セバスチャン・メルシエは、『タブロー・ド・パリ』(1782-1789)の中で、多種多様な召使階級について再三言及し、彼らが家族の一員同様だった古き良き時代を懐かしんでいる。さらに「吊られ損ねた女中」と題した章では、主人の誘惑を拒んだばかりに窃盗の濡れ衣を着せられ、絞首刑にされたものの奇跡的に蘇生した女中の挿話を紹介し、虐げられし労働者への同情を寄せている。しかしメルシエは、上流階級が虚栄心ゆえに召使を増やすことにはきわめて批判的であり、「召使・従僕たち」という断章では、地方で農業に従事すべき人材のパリへの流出と、それに伴う悪徳の浸透を鋭く指摘している。

パレードのためだけに編成された、この無用な召使たちの一大隊は、都会に侵入しうるもっとも危険な腐敗の集団である。そこでは数多の放蕩が生まれ、醸成し続け、遅かれ早かれほとんど不可避の災厄をもたらさんとしているのだ<sup>5</sup>。

しかしフランス革命は近代社会に、個人の権利の拡大に伴う大きな意識の変革をもたらす。それは、男女が核となって形成する「家族」という価値の頭場であり、夫婦や親子の関係の再確認であった。公私の境界により明確な線引きを設けるため、日常生活はとりわけ空間的な意味において仕切り直され、再定義されたのである<sup>6</sup>。多くの一般家庭の内部は細分化と序列化を目指し、

---

ては、エレナ・レアルの以下の比較文学的論考を参照されたい。Elena Real, « Le Statut de la servante dans le roman espagnol et français du XIX<sup>e</sup> siècle », in *Espaces domestiques et privés de l'hospitalité*, sous la direction d'Alain Montandon, coll. « Littératures », Clermont-Ferrand, Presses Universitaires Blaise Pascal, 2000, pp. 149-161.

<sup>5</sup> Louis-Sébastien Mercier, *Le Tableau de Paris*, édition établie sous la direction de Jean-Claude Bonnet, t. I, Mercure de France, 1995, p. 406.

<sup>6</sup> 19世紀フランスにおける「私生活」の変遷については、フィリップ・アリエスとジョルジュ・デュビュ編集の『私生活の歴史』全5巻のうち、第4巻において特に詳しい研究がなされている。「公と私の関係は、革命後のあらゆる政治理論の中心にあった。国家と市民社会、共同的なものと個人的なものとの関係にいかなる定義を設けるかは、重要な問題となった。」(*Histoire de la vie privée*, sous la direction de Philippe

客間と女主人の閨房、そして夫婦の寝室の区別、カーテンや衝立といった仕切りが意識的に導入された。子供部屋も独立した空間として数えられる一方で、不潔な台所や最上階の寒々しい小部屋は、主人たちの物理的な生活空間から遠ざけられ、召使たちの領域とはっきり定められたのだった。

こうした潮流と並行するように、18世紀後半から19世紀にかけて多くの画家が、理想化された家庭の幸福を写し取る室内画を試みている。つまり「私生活」の概念が発展するにつれ、公には隠された生活を透視しようとする芸術家の世界観もまた成長したのである。たとえば、シャルダンやブーシェ、グルーズらは親密な家族の情景を細やかに描いているが、いずれも若い料理女の肖像を残しており、家庭に遍在する女中が独特のファンタスムの対象であったことを示している。また、躍進したブルジョワ階級は、「家庭生活」の構築に必要なだけの召使を雇用するシステムを模索し始め、彼らの経験や職種に応じて給与体系を決めた<sup>7</sup>。しかしより近代的な家庭生活のモデルを提唱したジュール・ミシュレは、その著書『愛』(1858)の「彼らは互いに仕える」と題した章で、夫婦だけで私生活の維持に努めるよう強く推奨している。

私はこの書物を、無数の煩わしく有害なことで訳もなく生活をややこしくする金持ちのために筆を執っているのではない。彼らは、召使たちの眼前で暮らし(つまり彼らの敵の眼前で、と読み替えていただきたい)、私生活や秘密や家庭をまるで持たない。[...] 私は思い通りに生活を整えられる人たちが、自宅で働く程度余裕のある民衆や、すすんで清貧の暮らしを営む人たち、要するに、召使を雇わずに無駄なく生活する気持ちもてる、真の意味で自宅で暮らすゆとりのある人に向けて書いているのだ。「3人ではなく2人で生活すること」、これは家庭の平和を保つ肝心な原則である<sup>8</sup>。

つまりミシュレは、平穏な家庭生活の実現のために、敵となり得る「よそ者の」の侵入を極力避け、スパイ同然の召使を極力雇わないことを勧めているのである。18世紀末と19世紀半ばに書かれたメルシエとミシュレの文章の

---

Ariès et Georges Duby, t. IV, *De la Révolution à la Grande Guerre*, Seuil, coll. « L'Univers historique », 1987, p. 93.)

<sup>7</sup> 当時の雇用環境を調査したジュヌヴィエーヴ・フレスによると、女中の序列では料理女と小間使いの給与体系が最も安定していた。「19世紀には料理女や小間使いのための研修があった。一般的な女子職業教育は、カトリックの施設やフェミニストのサン・シモン主義者エリザ・ルモニエによって1860年頃形になった。」(Geneviève Fraisse, *Femmes toutes mains. Essai sur le service domestique*, Seuil, 1979, p. 78.)

<sup>8</sup> Jules Michelet, *L'Amour*, in *Œuvres complètes*, éditées par Paul Viallaneix, t. XVIII, Flammarion, 1985, pp. 99-100.

性格の違いは、理想の家庭像に対する大きな意識の転換についての、貴重な証言である。女主人の手紙を盗み読む小間使い、主人のワインをこっそり飲み干す従僕など、戯画化された数々の絵を見る限り、プライベートシーを侵害する召使に対して募る警戒心は、当時の主人階級の共通意識だったと言える。

以上の歴史的背景を踏まえれば、勃興し発展したブルジョワ階級の家庭で起こる主従のドラマが、19世紀小説の新たな素材として見出されたことはごく自然な帰結である。たとえばバルザックの長編小説では、それだけで職種の一覧表が出来るほどの多くの召使が登場する。主人の財産に応じて変わる使用人の数は、その家の社会的地位を図る指標であり、往々にして困窮した家族は女中の数を減らそうとする。裏を返せば、19世紀までの小説において、主人公はどんなに貧しかろうとも主人側の階級に属しているのであり、召使階級に属する人間が主要人物となるケースは極めて少ない。アレクサンドル・デュマの『三銃士』(1844)やジュール・ヴェルヌの冒険小説では、主人に忠誠を誓う従者が何人も登場するが、これらの人物造形も伝統的な脇役としての召使の域を出ない。紋切り型な民衆のイメージにうってつけの召使たちは、多くの場合ドラマの二次的な存在に過ぎず、小説家が自立した個人として彼らを描き、心理の襞に分け入ることは殆どなかった。

しかし、ロマン主義が親密な私生活の内部に関心を寄せたのに対し、写実主義が未開拓の素材として労働者階級を見出すと、文学作品における召使の役割もまた一変する。長年忠実に仕えた女中の死後発見された手記に基づいた、「真実で深刻かつ純粋な小説 roman vrai, sévère et pur<sup>9</sup>」としてゴンクール兄弟の『ジェルミニ・ラセルトゥー』(1865)が発表されると、身を持ち崩した女中の知られざる秘密を描いた問題作として反響を呼んだ。さらにフロベールの『純な心』(1877)やモーパッサンの『田舎女中の話』(1881)などのコント、オクターヴ・ミルボーの『ある小間使いの日記』(1900)に至るまで、女中が主人公の物語は珍しくなくなる。家庭の内部への関心が強まるにつれ再発見された女中という存在は、男性の召使のようにステレオタイプと化した家庭の付属物ではなく、語るべき過去と記憶をまとった肉体として、少なからぬ小説家の関心を惹いたのである。出身階級にも雇われた先の中産階級にも完全には同化できない女中の特殊で曖昧な立場について、ミルボーは主人公の小間使いセレスティヌに以下のような独白をさせている。

<sup>9</sup> Préface de la première édition, Edmond et Jules de Goncourt, *Germinie Lacerteux*, Flammarion, 1990, p. 55.

召使なんて、まっとうな人間でも社会人でもないわ…。くつつけも積み重ねもできない破片で出来た、ちぐはぐな存在だもの…。もっとひどいかもね、奇怪な雑種人間ってところ…。出てきた庶民層にも、そこで暮らして仕えるブルジョワ階級にも馴染んでるわけじゃない…<sup>10</sup>。

「ちぐはぐな存在」かつ「雑種人間」である召使は実際、最上階に追いやられ、籠の鳥にも似た生活を強いられていた。また、他人の私生活に奉仕しながらも、自身の私生活をほとんど持てない女中たちは、事実上独身の定めを負い、母になることを諦める場合も多かった<sup>11</sup>。フロベールの『純な心』でつましい生涯を終える独身のフェリシテ、モーパッサンの『女の一生』(1883)の中で、女主人の新婚初夜からその夫に関係を強いられ、妊娠して家を追われるロザリーのどちらもが、多くの女中が遅かれ早かれたどる典型的な末路だったのである。セレスティーヌは、主人宅で窃盗を仕組んだ元従僕と結婚し、退職してル・アーヴルのカフェの女主人になるが、これは曖昧な立場を脱却して自立を勝ち取るための貴重な選択肢だったと言えるだろう。

自らの手を汚さず理想的な「私生活」を営むために、中産階級にとって召使の存在は不可欠である。しかしそれは家庭への部外者の侵入を許すことでもあり、秘密の暴露、貴重品の窃盗、子供たちへのよからぬ性教育など、幸福な「私生活」のモデルと真っ向から対立する種々の危険を招くことでもあった。一方の女中たちは、毎日主人の食卓を整えながらも、決して家族と食事を共にすることはなく、女主人の身だしなみを世話しながらも、どんな装飾品も自分では使えなかった<sup>12</sup>。家庭生活の構成員である召使に対する主人側の警戒心と不信感、そして自らに禁じられた他人の「私生活」を維持する召使側のストレスと欲求不満とは、見えざる緊張と化して19世紀の家庭内に醸成されていたのである。『ルーゴン=マッカール叢書』で描かれる「私生活」の情景とは、これらの雑居的な家庭空間の孕む危うさ、脆さに他ならない。

<sup>10</sup> Octave Mirbeau, *Le Journal d'une femme de chambre, Œuvre romanesque*, édition critique établie, présentée et annotée par Pierre Michel, Buchet/Chastel, vol. 2, 2001, p. 496.

<sup>11</sup> Cf., Anne Martin-Fugier, *La Place des bonnes : la domesticité féminine à Paris en 1900*, Éditions Grasset et Fasquelle, 1979.

<sup>12</sup> メルシエは、小間使いについての章で、「身だしなみのときの会話が一番興味深い。尊大さと親密さと信頼、そして定義しがたい軽蔑が混じっている」と書き、女性同士の独特な緊張感を活写しているが、この微妙な関係性はゾラの小説の主従関係を読み解く上でも重要となる。(Mercier, *op. cit.*, p. 1346.)

## 2. 『ルーゴン=マッカール叢書』の脇役たち：神父・医師・女中

『ルーゴン=マッカール叢書』全20巻に登場する数多の副次的人物の体系においても、召使階級は一定の数を占めている。ところがその造形の多様性にもかかわらず、女中たちは決して主人公にはならなかったため、「ゾラにおける女性像」というより広範なテーマ研究のごく一部として扱われ、その総体が十分に論じられてきたとは言えない。しかし、そもそもルーゴン=マッカールの一族という根本的な核を持つ叢書において、なぜ他者に過ぎない女中の物語への介入がかくも必要とされたのかは一考する必要がある。

1868年頃から叢書の本格的な準備を始めたゾラは、バルザックの『人間喜劇』の壮大な小説世界に匹敵し得る、同時代の一大絵巻として計画した。しかし当初10巻を予定していた連作は、「一家族の自然的・社会的歴史」という副題が示す通り、『ボヌール・デ・ダム百貨店』など19世紀産業社会のパノラマ的な描写だけでなく、家族のドラマとして全体を連関させることを志向していた。ゾラは編集者アルベール・ラクロワに提出したプランにおいて、近代社会を庶民・商人・ブルジョワジー・上流社会という4つの階層と、娼婦・人殺し・聖職者・芸術家で構成される「例外的な社会」に分類した<sup>13</sup>。かくて5つの世界をまたぐルーゴン=マッカールの血脈の繋がりを、膨大な人物群が取り巻くのである。しかし、当初予定されていた登場可能な職業人のリストに、「召使」ないし「女中」という言葉は見当たらず、叢書の執筆中にゾラが召使の生活実態について取材をした形跡も確認できない。にもかかわらず、女中たちは、神父・医者という職業に並んで、この5つの階層すべてに遍在し、登場頻度が最も高い類型のひとつとなっている。最終巻『パスカル博士』(1893)執筆中に作られた、全20巻の主要ヒロインのリストには、最後に「女中たち *Les Servantes* 」というメモが見られ、増殖し続けた女中の群像が叢書を総括する際に無視し得なくなったことを示している<sup>14</sup>。

1871年の第1巻『ルーゴン家の運命』を皮切りに、5つの世界を順々に取り上げる傍ら、ゾラは並行して第4巻『プラッサンの征服』(1874)や第8巻『愛の一ページ』(1878)、第12巻『生きる歓び』(1884)など、後からブ

<sup>13</sup> 「4つの世界がある。民衆：労働者、軍人。商人：都市工事の投資家と上級商業（産業）。ブルジョワジー：成金の息子たち。上流社会：政府官僚と社交界の人士、政治 — そして例外的な社会：娼婦、人殺し、神父（宗教）、芸術家 — （芸術）」（*Ms. N.A.Fr. 10.345, f° 22. Voir, La Fabrique des Rougon-Macquart. Édition des dossiers préparatoires, publiés par Colette Becker avec la collaboration de Véronique Lavielle, Honoré Champion, t. I, 2003, p. 50. 以下、FRMと略記する。*）

<sup>14</sup> *Ms. N.A.Fr. 10.290, f° 138.*

ランに挿入された作品を通して、平凡なブルジョワ家庭のドラマを描くことを明確に意図した。そしてこれらの物語には、神父・医者・女中という3種の副次的な人物が、ほぼ例外なく介入してくる。概して19世紀における私生活の営みとは、今日のように家族の間で完結するものではなく、食事への招待、医師の往診や神父の訪問など、選ばれた他者との日常的な交わりによって維持されていた。つまりブルジョワを題材に小説を構成するためには、彼らに欠けている視点を補う、家族以外の第三者の視点が不可欠となるのである。『ごった煮』に限らず、ゾラの準備草稿の登場人物リストを見ると、多くの場合において医師、神父、女中はひとつづきに載っており、三者は一組として登場する。たとえば、第5巻『ムーレ神父のあやまち』（1875）では、アルシャンジア修道士、パスカル医師、トゥーズばあやがムーレ神父を取り巻き、『愛の一ページ』ではジューヴ神父、ドゥベルル医師、女中ロザリーが主人公エレーヌの家庭を支え、『生きる欲び』では、オルトゥール神父、カズノーヴ医師、女中ヴェロニクが主人公ポーリーヌの助言者となっている。

これら副次的な登場人物を造形する際、ゾラはステレオタイプの量産を避けようと努めており、第20巻『パスカル博士』（1893）で最後の独身女中マルティースを創造したときは、草稿に「特に、ヴェロニクやローズのような不平たらたらの女中にしないこと<sup>15</sup>」という但し書きをつけている。しかし作品を変えてオブセッションのように繰り返し現れる、神父・医者・女中という登場人物のパターンは、ゾラが抱いている「私生活」に関する一貫した概念を体現している。彼らは物心両面におけるブルジョワの必要を満たすだけでなく、神父は告解、医者は診察、女中は日常生活の共有によって、他者でありながら家族の内密な情報を共有し、噂話や情報の媒介者となるのだ。

カトリックを批判し科学に信頼を置くゾラの思想的立場ゆえ、聖職者と医師という脇役は、小説の中で好んで対置される。ムーレ神父や『ブラッサンの征服』のフォージャ神父など、一部の主要人物を除けば、神父の類型はおおむね平凡である種の諦念を備えた好人物が多い。対する医師は、年齢も専門も多様だが、しばしば患者の医学的無知に悩まされている。『ごった煮』で登場する一対の人物は、モージュイ神父とジュイユラ医師である。境界のあらゆる令嬢と奥方の懺悔を聴いたモージュイ神父と、すべての婦人病や出産を手がけた老産婦人科医のジュイユラは、夜会では無料の相談にも応じるサロンの常連である。太って気のいい神父と、痩せて神経質の医師という外見上の対照のみならず、神父は法王至上権主義者、医師は革命派の無神論者と

<sup>15</sup> Ms. N.A.Fr. 10.290, f° 64.



いう風に、思想的にも好敵手である。しかし2人は、ブルジョワの性にまつわるいかにわしい秘密を知り抜いており、その一点のみにおいて共感しあい、アパートマンに吹き荒れるいかなるスキャンダルも諦念をもって受け止める。

モージュイ神父とジュイユラ医師はのろろ階段を降りた。2人にも聞こえたのだ。[...] 玄関の丸天井の下で、司祭は疲れて立ち止まった。「なんてみじめなんでしょう！」と彼は悲しく呟いた。「これが人生ですよ」と医者も頷いた。彼らは人の死や誕生に立会い、並んで出てくるたびにこの感想を交わすのだった。正反対の信念を持ちながらも、2人は時に人の弱さについては意見が合った。司祭は奥様方の懺悔を聞き、医師は30年前から母親の出産に立会い、娘たちを診察してきたため、どちらも秘密を共有していたのだ<sup>16</sup>。

家庭の奥で営まれる本来の「私生活」ではなく、社交的な「私生活」にのみ干渉する人間でありながら、神父と医者の方が家族や隣人よりもブルジョワの秘密に精通しているという状況は、作家による痛烈な皮肉である。しかし、神父や医者が、夜会や結婚式・葬式など家庭が他者に開放される機会に外側から訪れるのに対し、社会的には下位にある女中たちは、家庭の内側で家族と日常生活を共有する点が決定的に異なっている。つまりは、19世紀特有の家庭空間の「雑居性」を体現する存在が『ごった煮』の女中たちなのだ。彼女らもまた、田舎者、パリ育ち、長く仕える者、若くして墮落する者など、年齢も容貌も職業観も多様でひとつのステレオタイプに収斂することがない。さらに、ゾラが準備段階で5つに分類した社会の境界線は曖昧で、その内部ではつねに身分の上昇と下降が起こっている。当然主人と召使の間柄も、後者が一方的に前者に従属するのではなく、しばしば金銭問題や肉体関係を通して立場の逆転が起こる。家庭内の主従関係に生じる転倒の例を、『ごった煮』という作品は繰り返し描いている<sup>17</sup>。

叢書の初期段階から、女中たちは他人であり身内でもあるという曖昧で特

<sup>16</sup> *Pot-Bouille*, in *Les Rougon-Macquart*, édition intégrale publiée sous la direction d'Armand Lanoux, études, notes et variantes établies par Henri Mitterand, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », t. III, 1964, p. 362. 本論での『ごった煮』の引用はすべてこの版を典拠とする。

<sup>17</sup> フィリップ・アモンは、こうした「私生活」の危うさをゾラ特有の家庭観であると強調している。「ゾラにおける私生活とは、登場人物の間でも一番共有されることの少ない、いわば「穴」や「片隅」もしくは牧歌的な場所など、もっとも求められ、もっとも脅かされる、困難で脆弱な何かである。」(Philippe Hamon, *Le Personnel du roman. Le Système des personnages dans les Rougon-Macquart d'Émile Zola*, Genève, Droz, 1983, pp. 295-296.)

殊な立場によって、家庭のドラマに深く介入してきた。その人物造形は大きく分けてふた通り存在する。まず、メルシエが懐かしむ「家族の一員だった」女中には、『プッサンの征服』の忠実だが噂好きなローズ、続く『ムーレ神父のあやまち』で口うるさく主人公の世話を焼くトゥーズばあや、または『愛の一ページ』で未亡人エレヌとその娘ジャンヌに尽くす田舎娘ロザリーなどが数えられる。彼女たちは伝統的な田園小説、ひいてはフロベールやモーパッサンのコントに登場する田舎女中の系譜に属する、素朴で害のない家庭の協力者と言えよう。しかしミシュレの警告した「私生活の敵」である、都会の油断ならない召使も少なからずおり、第2巻『獲物の分け前』(1872)の、主人公ルネの着付け係セレスト、第6巻『ウジェーヌ・ルーゴン閣下』(1876)の、社交界の美女クロリンドの女中カロリーヌ、第9巻『ナナ』(1880)の小間使いゾエなどが挙げられる。彼女たちの共通点は、女主人に従順に仕えながらも謎めいた沈黙を守り、決してその本心を明かさないことである。

コルバンは、ブルジョワにとって召使は自らの優位と権力を確認させてくれる家庭の見張りだったと定義している<sup>18</sup>。しかし、『ルーゴン=マッカール叢書』で召使が見張るのは、反対に家庭の内側であり、主人の一挙手一投足に他ならない。ゆえに、女中の存在は不安や違和感を掻き立てるのであり、伝統的な主従関係は転覆されるためにあると言っても過言ではない。『ごった煮』の舞台となるアパートマンでは、こうした象徴的な逆転劇が、客間や寝室という主人の領域と、台所と女中部屋という召使の領域の対比、さらに階段往復による人物たちの移動を通じて周到に準備されている。次章からは、作中で主従の緊張した関係が具体的な衝突へと発展する過程を検討したい。

### 3. 女中たちの領域：台所と最上階

ゾラは1881年の『ル・フィガロ』紙に、民衆から娼婦が生まれ、中産階級から不倫が生まれる、そしてブルジョワの娘は召使によって墮落するという趣旨の記事を描いている<sup>19</sup>。この「中産階級の不倫」や「召使による少女の

<sup>18</sup> 「ブルジョワの言説が飽かず女中に触れるのは、なによりその存在が安心感をもたらすからだ。女中は社会秩序の永続性を象徴する。外界の脅威から家庭を守る抜かりない見張りとして、女中や従僕は規範の監視人に昇格し、ルールを知りぬき、場合によっては無遠慮な主人にそれを思い出させもする。[...] 女中の存在は社会の階級制度を保障してくれる。彼らを辱めることでプチブルジョワの権力は保障されかつ正当化される。彼らに依拠することは、巧妙な家族主義を行使し、プロレタリアの脅威を弱めることである。」(Corbin, *op. cit.*, p. 82.)

<sup>19</sup> « Femmes du monde », le 27 juin 1881, *Le Figaro*, in *Œuvres complètes*, publiées sous la

墮落」に対する危機意識を念頭において『ごった煮』は執筆された。ゾラは初期プランの最初の一文にこう記している。「ブルジョワたちの罪悪感の欠落：決定的特徴。ブルジョワジーについて語ることは、フランス社会に対する最も痛烈な告発となる。[...] 民衆を見せたあとは、ブルジョワジーをむき出しにし、秩序とまっとうさを語る彼らの、よりおぞましい面を見せる<sup>20</sup>。」作家の意図するところはすなわち、人目に触れないはずの「私生活」のあらゆる側面を透視することである。冒頭で触れたように、ブルジョワジーの「おぞましい面」を目撃する役割は、主人公のオクターヴ・ムーレ青年が担う。

神父と医者が登場場面に関して述べたように、ゾラは『ごった煮』において、中産階級のふた通りの「私生活」の側面を描いている。ひとつは、18世紀のサロン文化から19世紀のロマン主義へと通じる、ごく限られた内輪の人々と楽しむ共同空間での親密なひと時である。もうひとつはさらに秘めやかな、寝室や鍵のかかる個室での家族の営みである。「日々は流れ、オクターヴはぬくぬくした寝袋にもぐるように、家の中にもぐりこんだ<sup>21</sup>」とあるように、主人公は第一の社会的な空間のみならず、第二のより厳密な意味での私的空間にまでもぐりこみ、そこに自分の居場所を作ること、すなわち自らの存在を「よそ者の侵入」と認知させない術を身につける。こうした緩慢な私生活の侵犯は、ゾラのほとんどの作品におけるライトモチーフでもある。さらに彼は、単に居候としてブルジョワ家庭の観察者となるのではなく、積極的に主人の領域から召使の領域へと踏み出して行く。たとえば第5章と第18章のサロンの場面と、第6章と第17章の台所と女中部屋の場面は、オクターヴの視線によって中継され、ひとつの出来事の表と裏を鋭く対比させる。

『ごった煮』のアパルトマンは、各階にガスと水道が完備し、暖房の効いた正面階段には赤絨毯が敷き詰められている。玄関ホールは、模造大理石や大鏡、マホガニーのドアなどで豪華な雰囲気をもたう。いかめしいファサードに内包された「親密な」小世界は、複数の境界線によって仕切られ、公と私がかみ合い、時に交じり合う、特殊な雑居空間なのである<sup>22</sup>。しかし物語の冒頭からオクターヴは、この豪華な外観の裏に、さらに別の世界が隠れ

---

direction de Henri Mitterand, Nouveau Monde éditions, t. X, 2004, pp. 856-857.

<sup>20</sup> Ms. N.A.Fr. 10.321, f° 1. Voir, *FRM*, t. III, 2006, p. 608.

<sup>21</sup> *Pot-Bouille*, p. 236.

<sup>22</sup> 内部の私生活空間を荘重な外観に包み込み、外界の危険から守るというのが当時の住宅が志向した様式であった。ゾラは建物の内部空間の位相に注目し、扉・門・階段・廊下などの仕切りや境界線を逐一象徴化している。「家とは内部の闘いの争点であり、公と私、男と女、親と子、主人と召使、家族と個人がかみ合う曲折した境界がはりめぐらされた小世界なのである。」(*Histoire de la vie privée*, p. 510.)

ていることを嗅ぎ取る。女中たちが観察した家族のゴシップが、台所を通して漏れ聞こえてくるからだ。各階の台所は中庭をはさんで向かい合い、湿って悪臭の漂う中庭めがけて、女中たちは臓物や汚水などのごみを投げ捨てる。

突然、凄まじい騒ぎが台所から聞こえてきた。この寒いのに、窓は開け放たれていた。浅黒い小間使いと、丸々した年増の料理女が窓の手摺りにつかまって、狭い井戸のような中庭に身を乗り出していた。中庭ではすべての階の台所が向かい合っていた。二人は腰をぐっと伸ばし、一緒に叫んでいた。すると中庭の奥底から、笑い声や悪罵の混じった下品な声がわっと湧きあがり、まるで下水があふれたようだった。この家の召使が一堂に集まって、憂さ晴らしをしているのだ。オクターヴは、正面階段のブルジョワらしいいかめしさを思い出した<sup>23</sup>。

開かれた台所の窓を通して飛び交う噂話は、ブルジョワが隠しおおせたとはい込んでいる虚実が、実際は建物全体に筒抜けであることを示し、服従と品行を女中に期待する主人たちの滑稽さも暴いている。上昇志向をもちながら、いかがわしい女中の世界への好奇心を隠せないオクターヴは、階段や廊下の移動を通じて、建物に隠された二重の世界の探索に乗り出す。他家の女中にすぐ手を出してしまう放蕩家の株式仲買人トリュプロが指導者となり、オクターヴを女中たちの領域である台所や女中部屋へと導いて行く。どの女中とも寝るのかと呆れるオクターヴを、トリュプロは徐々に教育する。

ちょうど若い女中がパンチのグラスを愛想よく回しにきたので、オクターヴは一杯取って友人に耳打ちした。「女中のほうが奥方よりそそるな。」「ちえっ！いつだってそうさ！」と馬鹿にした確信をこめて、トリュプロは肩をすくめた<sup>24</sup>。

第6章で近道の裏階段を通ったオクターヴは、女中部屋が並ぶ最上階に偶然迷い込む。「病院の廊下のように、黄色い召使部屋の扉が規則的にきっちりとは並び、チンクの屋根から冷気が忍び込んできた。さっぱりとむき出しで、貧乏人の住まい特有の饅えた匂いがした<sup>25</sup>」と描写される寒々しい光景は、階下の装飾と著しいコントラストを成す。しかし、外からは荘重に見える建物の最上階と階下の世界は、見かけの対照以上に異なる生活方式に基づく空間として厳然と分かたれている。ゾラが準備段階で描いた間取りによると、最

---

<sup>23</sup> *Pot-Bouille*, p. 9.

<sup>24</sup> *Ibid.*, p. 134.

<sup>25</sup> *Ibid.*, p. 101.

上階には異なる家庭に勤める 10 人以上の使用人が巧みに配置されている<sup>26</sup>。そこでは、建築家の女中リザとヴィクトワール、裁判官の女中クレマンズと料理女のジュリー、敬虔な未亡人の女中ルイズらが、折り重なるように暮らしている。ジュリーとの逢引を重ねて最上階を知り尽くすトリュプロは、それぞれの性生活まで事細かに述べている。たとえば「厄介なのは女中たちは誰もが盗難を心配するあまり、ただ廊下の端に行くだけでも、部屋の鍵を二重に回すことだった<sup>27</sup>」という一文は、最上階の劣悪な環境を端的に表している<sup>28</sup>。台所での連帯意識にもかかわらず、個々の生活において互いへの信頼感は欠落している。女中アデルの人物設定に「あらゆる噂話。ブルジョワ同士の軽蔑も、召使たちの住む階で再現される<sup>29</sup>」というメモがあるように、彼女たちの働く家庭で見聞きした悪徳や卑語だけが伝染して行くのである<sup>30</sup>。空気のこもったジュリーの部屋の窓をオクターヴが開けると、そこは中庭に面しており、階下の台所で交わされる主人の悪口が開こえてくる。

「気をつけて、奥様よ！」途端にしんとなった。女中たちはみなそそくさと台所に引っ込んだ。そして狭い中庭の暗部からは掃除の行き届かない下水の悪臭が立ち上った。まるで召使たちの憎悪が噴出させたそれぞれの家庭の秘めた悪臭のようだった。これこそこの建物の恥部であるゴミ捨て場だったが、かたや主人たちはスリッパをつっかけてくつろいでいた。正面階段はむっとする暖房の熱に包まれ、各階の厳かな雰囲気を見せつけていた<sup>31</sup>。

<sup>26</sup> Ms. N.A.Fr. 10.321, f° 394. Voir, fig. 1.

<sup>27</sup> *Pot-Bouille*, p. 263.

<sup>28</sup> 18 世紀の画家ニコラ＝ベルナル・レピシエの作品に、『ファンションの起床』(1773) という有名な絵画がある。そこには粗末なベッドで身支度をする少女が描かれているが、部屋には掃除道具や部屋着が散らかり、仕事と余暇の区別がない生活が表れている。『ごった煮』の時代においても相変わらず、女中たちからは私生活というものが奪われていた。「台所やすし詰めの中部屋に遠ざけられても、召使たちは呼び鈴の仕組みを通してつねに主人の監視下にあり、たえず雇い主や主人の用に役立てられた。」(Charles-Arthur Boyer, « Architecture, intimité, promiscuité : l'évolution de l'espace domestique en France du Moyen Âge au XIX<sup>e</sup> siècle », in *L'Intime*, sous la direction d'Élisabeth Lebovici, École nationale supérieure des beaux-arts, 1998, p. 63.)

<sup>29</sup> Ms. N.A.Fr. 10.321, f° 283 (Zola souligne). Voir, *FRM*, t. III, p. 978.

<sup>30</sup> ロラン・バルトは『ごった煮』において、召使の言動は主人の深層心理の鏡として働いていると指摘する。「召使。主人たちの言葉をそっくり真似る喜劇。狭い中庭(台所)は、主人たちが押し殺している言葉を下品な言葉に言い換え、反映する。」(Roland Barthes, *Comment vivre ensemble : simulations romanesques de quelques espaces quotidiens. Cours et séminaires au Collège de France (1976-1977)*, sous la direction d'Éric Marty, texte établi, annoté et présenté par Claude Coste, Seuil, 2002, p. 116.)

<sup>31</sup> *Pot-Bouille*, p. 107.

当時の中庭と台所は、建物の表側から見えない日陰で湿気の多い場所に位置しており、衛生観念が発達してきた19世紀には、一般家庭の主人でも自ら足を踏み入れることを厭った一画である。こうして女中部屋を含めた三つの空間は、ブルジョワの理想とする私生活の快適さから切り離され、召使とともに生活空間の外へ追いやられていた。ゾラは、半ばごみ捨て場と化した不潔な中庭というトポスに注視し、墮落したブルジョワの裏面になぞらえて象徴化している。そればかりか、上空へと立ち上る悪臭や響き渡る女中の罵声を描くことで、地上と各家庭の台所、そして最上階の女中部屋という召使のテリトリーを一本の縦の線で結んでいる。この線をたどってブルジョワの悪徳は女中部屋へと伝染し、かくて両者の世界を隔てる境界は曖昧になっていく。

その夜、トリュプロ青年はだいぶ退屈しており、哲学的な物の見方をした。彼はつづやいた。「まったく！ この主にして、この従僕ありってね…。雇い主がお手本を見せれば、召使もまっとうにしていられるものか。ああ、フランスもてんで駄目になったもんだ<sup>32</sup>！」

このようにトリュプロは皮肉めかした警句を吐くが、彼もまた女中に手を出して妊娠させる独身青年の典型であり、階下と切り離された女中部屋につきまとうファンタスムに憑かれる、倒錯したブルジョワのひとりなのである<sup>33</sup>。

『ごった煮』の建物内で対比されるもうひとつのトポス、正面玄関脇の管理人部屋と女中たちのテリトリーに注目してみよう。アパートマンの管理人は、以前とある公爵の従僕だったグール氏である。管理人夫妻は、ブルジョワのプライヴェーシーの番人としての役割を過度に意識している。暖房の調節や水掃除の監督だけでなく、胡乱な部外者がもたらす外的な危険を予測して排除に努め、「私生活」の維持に貢献する特権をひたすら誇示するのだ。快適で安心な「私生活」を希求するブルジョワ意識の権化と言ってもよい人物で

<sup>32</sup> *Ibid.*, p. 263.

<sup>33</sup> 19世紀における主人の召使への態度は、18世紀のように無頓着なものではなく、意図的な無視であった。それは労働者階級に対する潜在的な怖れの裏返しであり、かくて最上階には特殊な幻想が醸成された。「19世紀によく行われた問題の切り抜け方は、男女の召使の否定であり、その肉体の消去であった。アンヌ・マルタン＝フュジェが論じた「否定された肉体」は、苗字のみならず名前も消されることがあった。『娘や、これからあなたはマリーよ。』女中にとって家庭的にしる性的にしる私生活をもつことは不可能だった。自由になる時間も空間もそれを手に入れる権利もなかった。どんなに調度がありきたりで雑居状態でも、彼らは6階で眠り、「掠め取った歓び」が味わえる距離を保った。そこから主人たちは、社会的または性的幻想がはびこる6階に対する怖れを育んだのである。」(*Histoire de la vie privée*, p. 184.)

ある。管理人部屋の内装はいかにもブルジョワ風だが、正面玄関と中庭の横の裏階段が両方とも見張れる間取りになっている。表舞台と舞台裏の中間に位置するこの部屋は、家主たちの髪形や服装を真似るほどブルジョワになりたくて仕方がないが、完全に同化できない召使あがりのグール氏の立場そのものである。ゆえに管理人は屈折した上昇志向にとらわれており、たとえば玄関掃除に雇われた従順な老婆を、彼はことさら尊大にこき使う。

「まったく！ 婆さん、しみひとつなくなるまで、もっと気合を入れてこすれよ！」厚着したグール氏は、管理人室の戸口に仁王立ちになって叫んだ。そしてオクターヴがくると、召使あがりの人間らしく、次は自分の番だという激しい復讐の念にかられ、ペルーお婆さんのことを乱暴な支配者気取りで愚痴った<sup>34</sup>。

グール氏は、召使だった過去を拭い去り、自らが同化しようとするブルジョワと女中の境界線を強調することで、自身の優位性を確認している。しかし中庭からは否応なしに、ブルジョワたちの耳には届かない女中たちの罵詈雑言が毎朝響いてくる。「『ただ、あのえげつない女中ども！』と、長い召使経験によって女中たちへの憎しみを植え付けられたグール氏が唸った<sup>35</sup>」という一文が示すように、召使たちに連帯意識があるわけではなく、むしろ彼らはブルジョワよりあからさまな上下意識に支配されており、ひとたび社会階層を昇った者は下位の者により過酷に振舞うのである。ブルジョワに対する劣等感の入り混じった奇妙な憧れは、女中側にも潜在する。オクターヴは、料理女ジュリーの侘しい部屋で、女主人からくすねた装飾品や衣類を見つけ、奥様を真似たがる女中の虚栄心を覗き見る。召使たちには、主人への軽蔑だけではなく、仕事で目の当たりにする豪華な生活への密かな欲望がある。汚物を押しつけられ、台所へと疎外される彼女たちの怨恨はそれゆえ深い。

第10章では、女中部屋での刺激的な密会を試みたオクターヴ青年と人妻ベルトが、台所の窓越しに交わされ、中庭に響き渡る女中たちの噂話を聞いてしまう。恋人たちは、まさに2人を当てこすった卑猥な陰口の一部始終に打ちのめされ、召使の主人階級への憎しみと侮蔑の凄まじさに唾然とする。

オクターヴはやり場の無い怒りに息がつまり、ベルトの手を取ってぎゅっと握った。どうしようか？ 顔を出して女中たちを黙らせることもできない。若妻が耳にしたこともない下品な応酬が続いた。毎日すぐそばで流れていたが、気

<sup>34</sup> *Pot-Bouille*, p. 99.

<sup>35</sup> *Ibid.*, p. 101.

づきもしなかった下水の奔流だった。2人の恋は慎重にひた隠しにしてきたのに、野菜屑や汚水にまじって女中たちの語り草になっていた。彼女たちは誰からも何も聞かず、しかしすべてを知っていた。[...]そして淫らな当てこすりは、2人のキスも密会も、まだ残っていた愛情の快い甘さもみんな汚してしまった<sup>36</sup>。

陰口など夢にも思わなかったベルトは、各家庭の暴露話を聞いて心底驚き、女中部屋での情事を激しく拒む。このように、主人が女中の領域を侵犯することは、ブルジョワがもっとも恐れる秘密の暴露にさらされる危険を伴う。隠し続けてきた真の性生活を女中たちによってむき出しにされて初めて、主人は召使こそがもっとも親密な「私生活」を侵犯する仮借ない見張りであったことを知るのである。ミシュレの警告した「敵」としての召使は、寄り集まって群像となることで、もっとも強力なブルジョワの告発者と化す。秘めた身づくろい、睦言、足音や扉のきしむ音などひそやかにこだまするアパルトマンの裏側には、あらゆる秘密がさらけ出される喧騒の世界が広がっており、ついには物語の表舞台を侵犯するに至るのである。

#### 4. ラシエルの反乱

ゾラは、『ごった煮』の準備草稿の中で、各登場人物の設定を決める際、それぞれの女中に関してはごく短いノートを書き留めたのみで、完成稿に反映すべき重要な伏線など、彼女たちが作中で果たすべき役割について言及してはいない。しかしここでは女中たちの群像に一步踏み込んで、召使の中でも疎外され、反ブルジョワの連帯にも溶け込めずにいる、2人の特殊な女中に注目してみたい。若妻ベルト・ヴァブルの小間使いラシエルと、ベルトの母ジョスラン夫人がこき使うアデールである。召使たちの序列においてさえ最下位にある2人の娘は、ブルジョワ階級に対するゾラの痛烈な批判を、作品終盤の異なる衝撃的なエピソードによって体現するからである。

前章の冒頭で述べたように、ゾラは当時の一般的な女子教育に対してきわめて否定的だった。革命派の進歩主義者という思想的立場において、作中ではゾラの代弁者に近いジュユラ医師は、ブルジョワ階級の女性に対して「ある者はお人形のような教育のために墮落し無知で、またある者は遺伝的神経症で感情や情熱が狂っており、欲望も快楽も感じぬままに浅はかで不潔な淪落に陥る<sup>37</sup>」という批判を加える。さらにゾラは、『ル・フィガロ』の記事で

<sup>36</sup> *Ibid.*, pp. 268-269.

<sup>37</sup> *Ibid.*, p. 363.



批判した「中産階級の不倫」と「召使による少女の墮落」を、『ごった煮』のベルトとオクターヴ、そしてカンパルドン家の女中リザと少女アンジェールという4人の人物によって、痛烈に風刺している。

『ごった煮』における女子教育の失敗例は、カンパルドン家の一人娘アンジェールである。父親は毎朝新聞記事に目を通し、赤で囲んだ記事は読むなと言いつ渡すが、娘はかえって目立つ赤枠の中を盗み読んでしまう。一方カンパルドン夫人は、快適な室内で惰眠を貪り、夫の不倫相手との3人暮らしを受け入れる怠惰な母親である。彼女は女中のリザを盲目的に信頼し、アンジェールを任せきりにする。「とにかくカンパルドン夫人はリザに入れ込んでおり、盗みを働かないことに驚いていたが、それも道理で彼女の悪徳は他にあった<sup>38</sup>」のだ。リザは主人宅の奇妙な三角関係をからかい、アンジェールに両親の寝室で起こる出来事を実演してみせ、倒錯した性教育を施してしまう。

2人とも日中の猫かぶりな服従の憂さ晴らしをしていた。特にリザは、13歳という不安定な時期につけこんで、ひ弱な少女の好奇心を満たしてやったアンジェールの墮落ぶりに、卑しい喜びを味わっていた<sup>39</sup>。

このように、リザの裏切りは意図的なものであり、主従関係における依存心は却って召使による復讐の機会を与えてしまうのだ。カンパルドン夫人は、私生活の快適さに守られていたがために、現実には家庭内で起こっている頹廢に目をつぶるのであり、一人娘の知られざる墮落はこうした無責任なブルジョワ教育の報いとして描かれている。

オクターヴと不倫の仲に陥るベルト・ヴァブルもまた、婚前の「お人形のような教育のために墮落し無知な」教育の産物である。ベルトは実家での母の態度を真似て召使に辛く当たるため、どの娘も奥様に音を上げて長続きしない。そこで、ラシエルという寡黙で謎めいた身元不明の女中が雇われる。

ラシエルという娘は、出自を隠してはいるがユダヤ人に違いなかった。25歳で、いかつい顔立ちに高い鼻、濡れ羽色の髪をしていた。[...] ラシエルはどんな無理な仕事でも嫌がらずに引き受け、乾いたパンをあてがわれながらも、淡々と家事をこなした。だが、眼を見開き口を引き結んで、奥様が彼女の言うことを何でも聞くようになる不可避の決定的な瞬間を待ち望む、鼻の利く女中だった<sup>40</sup>。

<sup>38</sup> *Ibid.*, p. 108.

<sup>39</sup> *Ibid.*, p. 278.

<sup>40</sup> *Ibid.*, p. 226.

ラシエルは、一を聞いて十を知るといった飲み込みの良さでベルトを幻惑する。しかし、「女主人の話題が出ると、あんたたちを取って食いそうな顔をする陰険女だよ！ 故郷で人でも殺したユダヤ人なのさ<sup>41</sup>」とリザが台所で陰口を叩くように、うわべの従順さに秘めた陰険な本心を窺わせる。ラシエルの過去の秘密は結局明らかにされないのだが、その容姿からユダヤ人と決め付けられた、女中部屋におけるラシエルの疎外は、19世紀小説において根の深い問題である<sup>42</sup>。非の打ち所のない働きぶりにもかかわらず、ベルトは本能的にラシエルの視線を怖れており、女中が私生活を見張っていると訴える。

「私が女中とぐるになってるですって！」と若妻は腹に据えかねて叫んだ。「何言ってるのよ。あなたが女中を買収して私を監視してるんじゃない！ そう、私はいつだって背後に女中の視線を感じるわ、逃げられもしないの…下着を替えるときだって鍵穴から覗かれてるかもしれないわ[…]。」この思わぬ反撃は、夫をたじろがせた。ラシエルは料理中の腿肉を手振り向き、胸に手を当てて抗弁した。「まあ、とんでもない！ 私は奥様を尊敬しておりますのに<sup>43</sup>！」

物分りの良さを装って主人の依存心を強めるラシエルの戦略は、実益という意味においてリザよりも巧妙である。ラシエルは単なる身の回りの世話ではなく、女主人の性生活までもすべて把握し管理しようとする。ベルトはオクターヴとの仲を夫にばらされないよう、女中に贈り物をして機嫌をとり始める。しかしオクターヴの部屋で過ごした夜明け、ラシエルが寝乱れた形跡のないベッドを眺めているのを見て、彼女は女中の沈黙に耐え切れず泣き出してしまふ。ところが「ラシエルはことさら慎ましく、何もかも心得ながら口の堅い娘を装って、まるでベッドを整え終わったかのように背を向けて枕を転がした<sup>44</sup>」ため、ベルトは女中への警戒を忘れて味方だと信じ込む。つま

<sup>41</sup> *Ibid.*, p. 268.

<sup>42</sup> 特に第18巻『金』(1891)では、主人公サッカーを通してまったくステレオタイプなユダヤ人観が語られており、叢書の人物体系におけるユダヤ人像は、改めて検討する余地がある。さらに付け加えれば、『ごった煮』に登場する女中のうち、出自や過去が語られる者はほとんどいない。エレナ・リアルによれば、脇役としての女中の悲哀は、こうした過去の抹消にある。「いつも名前と呼ばれ、時にあだ名をつけられる女中たちに苗字はなく、語り手やその主人、つまりは読者に対して、いかなるルーツも家族も絆も持たないかのようだった。[…]この身元や家族の絆の不在、出自の欠如は、多くの小説に繰り返し散見される。従って、家族を失った事情の説明がない限り、ある決まった時点で女中は既に家に住みついていたものとされ、物語は一貫して女中たちの出自や過去をごまかしてしまう。」(Elena Real, *op. cit.*, pp. 150-151.)

<sup>43</sup> *Poi-Bouille*, p. 241.

<sup>44</sup> *Ibid.*, p. 251.

り女主人から能動性を奪い、不倫のスキヤンダルへと押しやるのは、他ならぬラシエルなのがある。しかし物語の終盤でベルトに盗みの現場を押さえられると、彼女は沈黙を破り、台所女中たちよりも激しい反抗心を露わにする<sup>45</sup>。

ラシエルがベルトに追い出され、裏階段で八つ当たりをしていた。他の女中たちも、この寡黙で畏まった女中のあらは探せなかったのに、突然下水があふれるように罵詈雑言を吐き出したのだ。[...] 女中たちは揃って台所から踊り場に出て、聞き漏らさないように階段に身を乗り出していたが、それでもラシエルの乱暴さには驚かされた。やがてあまりの無節操に呆れて次々に引っ込んでいった。リザが皆の気持ちを代弁した。「やれやれ！ もういいよ。陰口はいいけど、あんな風に主人に突っかかるものじゃないわ。」[...] ラシエルはありったけの声で叫んだ。「あたしはただの女中ですよ。でもまっとうな女よ！ こんな見世物小屋のあばずれ奥様たちじゃ、誰もあたしの身持ちの良さにはかなわないよ！ ええ、出て行ってやるわよ。あんたたちには心底胸がむかつくわ<sup>46</sup>！」

ラシエルの復讐は、女主人が同性の召使に私生活をさらけ出すこと、特に共犯関係を結ぶことの危険を語っている。ベルトとオクターヴは、ラシエルの仕事中に女中の部屋で密会を試みたことがあり、この主人側からの召使の私生活の軽視および侵犯は、手厳しい告発の対象となる。毎朝主人を口汚く嘲っているはずの女中たちは、ラシエルの罵詈雑言の激しさに辟易するが、これには主人を完全に否定すると自らの存在意義も失われるという、召使同士の暗黙の了解が推測される。しかし、「主人よりも自分はまっとうだ」という召使階級の本心を代弁することで、ラシエルは主人側であるオクターヴの視点から紡がれてきた、『ごった煮』という群像劇の構成を転倒させるのである。しかしその動機は、労働者としての正義感や革命意識によるのではなく、女中自身の屈折した自尊心や欲望などのきわめて個人的な動機による。ラシエ

<sup>45</sup> アモンが指摘する通り、終盤で女主人を裏切る女中ラシエルのような行動は、第2巻『獲物の分け前』（1872）のセレストや『ナナ』のゾエにも見られる。否定し無視されてきた存在が沈黙を破るとき、主人公の視点から目指されてきた物語の到達点は覆される。なぜこうした副次的人物が必要とされたのかを問いただすことは、作家がフィクションの結末を決定するプロセスを知る上でも重要である。「人物類型の変奏のひとつに、無口で底知れない召使がある。彼らは主人たちの放蕩を迷っていた冷淡さで見届け、後押しするが、しばしば終盤で裏切る。ウジェーヌ・ルーゴンの秘書メルル、ナナの着付け係、『獲物の分け前』のパティスト、『ごった煮』のラシエル、クロリンドの女中アントニア、ルネの小間使いなど。これらの人物たちは、老いて勤のいいおしゃべりな女中（ヴェロニク、トゥーズばあやなど）のアンチテーゼとしての変奏である。」(Hamon, *op. cit.*, pp. 298-299.)

<sup>46</sup> Pot-Bouille, pp. 361-362.

ルの攻撃の前に、ベルトは恥じ入った沈黙をもって答えるしかない。ベルトとラシエルの対立は、台所や最上階に漠然とわだかまる、表に出ない階級間の摩擦ではなく、主従関係を越えた一対一の対決であり、女中という脇役は従属を拒否して主人公たちと拮抗する存在へと昇格するのだ。

## 5. アデールの出産

『ごった煮』において、いかめしい正面玄関に守られていると見えたブルジョワの優位性は、断続的に差し挟まれる召使の噂話や哄笑によって、徐々に突き崩されてゆく。そして決定的な逆転劇は、中盤から登場したラシエルによって引き起こされる。しかし、物語の序盤から張り巡らされた伏線によって、最終章で物語の結末を引き受けるもうひとりの女中がいる。物語の冒頭で、紋切り型の田舎女中そのものの姿を現す、ジョスラン家のアデールである。ベルトの母ジョスラン夫人は、招待日のご馳走を乏しい家計から捻出するために、日々の食事を極力切り詰める。つまり一家は、社会的な意味での「私生活」を維持するために、本来の「私生活」である家庭の安楽を犠牲にしているのである。この虚栄心を満たすために選ばれた召使が、その無知と不器用さにつけこまれたアデールで、食べたものを逐一教え上げるジョスラン家の待遇に音を上げない唯一の女中という理由で雇われ続けている。物語の終盤では、盗み食いを理由に週に一度は讒を言い渡されるようになるが、代わりの女中が見つからないので女主人の小言もまともに通じなくなる。

管理人のグール氏のコンプレックスや、ラシエルに対する女中たちの軽蔑を思い返すまでもなく、女中部屋においても19世紀社会における上下関係の法則は働いている。右も左も分らず、料理も下手なアデールは、当然召使たちの序列においても最下位にある。しかし、主人の息子や娘と性的な関係にある両隣のジュリーとリザから悪影響を受ける女中部屋にあって、無知ゆえの主人への従順が長続きすることはない。「しばらく前から、他の女中たちがアデールも反抗的に仕立て上げていた。彼女は墮落した<sup>47</sup>」というさりげない一文が伏線となっているように、アデールは台所の噂話を通して、服従の下に反抗心を秘めた一人前の召使になるための教育を受けるのだ。

女中たちは何だかんだ言っても、イポリットを尊敬していた。以前は貴族に仕えていたからだ。イポリットはリザを見下していたが、そのリザはアデールを

<sup>47</sup> *Ibid.*, p. 216.

軽んじて、金持ちの主人が貧しいブルジョワに対するよりも偉そうに振舞った<sup>48</sup>。

グルーズやブーシェらが描くたおやかで瑞々しい女中とはまるで異なり、不潔で食いしん坊なアデルは、いかなるファンタズムとも無縁の鈍重な肉体として描かれる。それゆえ毎朝台所で繰り広げられる主人への悪口に混じって、アデルの愚かさは女中たちの格好の攻撃対象となる。しかし彼女は最上階で、トリュプロ青年とドゥヴェリエ老人という2人のブルジョワの浮気相手になる。それは彼女が、抵抗を知らずあるがままを受け入れる唯一の女中だったからという理由に過ぎない<sup>49</sup>。しかし小説の終盤で、アデルは望まない妊娠に気づき、女主人にその事実を隠し通したままで出産日を迎える。

ああ、神様なんていないんだ！ 彼女の信心までが反抗の叫びを上げた。妊娠を新たな苦役のように受け入れてきた、家畜のような諦めも消し飛んだ。ひもじくてもろくに食わせてもらえず、不潔だぐずだと家中からこづき回されるだけではまだ足りず、主人たちから子供まで産まされるなんて！ ああ、ろくでなしども！ アデルは赤ん坊の父親が青年か老人なのかも分からなかった<sup>50</sup>。

アデルはこの時点で初めて、欲望を満たすために女中を奉仕させる主人たちへの、自発的な憎悪を露わにしている。妊娠で太った女主人は食べすぎだと責め、父親は誰かも分からず、陣痛の呻きを上げれば隣部屋と同輩たちに消化不良だと責められる<sup>51</sup>。主人に弄ばれ妊娠する女中という、メロドラマ風の素材になりかねないアデルの出産は、こうして主人からも召使たちからも疎外された絶対的な孤独の中で行われ、克明に描写される。『ムーレ神父

<sup>48</sup> *Ibid.*, p. 267.

<sup>49</sup> 主人や召使の汚物を押し付けられた果てに、アデルは出産し、その子を捨てる羽目になる。バルトはアデルのこうした受動性を「スポンジ」になぞらえている。「アデルは主人たちのスポンジだが、同時に彼女がいつも墮落させられいじめられる中庭や共同空間を支配する召使たちのスポンジでもある。二重の意味でスポンジなのだ。まったく除け者にされる孤独は、誰にも知られぬ怖ろしい出産の場面で描かれる。アデルは女中部屋で誰の眼も助けもなくひとりぼっちで子供を産み、その子はごみ箱に捨てられ、すべてが元通りになる。」(Barthes, *op. cit.*, pp. 121-122.)

<sup>50</sup> *Pot-Bouille*, pp. 368-369.

<sup>51</sup> アモンが指摘するように、腹から生じる欲望は、ゾラにおいて重要なライトモチーフのひとつであり、多くの記号が「腹」を指し示す。「『ごった煮』のアデルが、臍の緒とエプロンの紐をくくりつけて出産するなら、『生きる欲び』の最終章で老女中ヴェロニクは、「料理用エプロンの紐で」首をくくる。[...]「料理用エプロン」との関連、つまり腹であり身体的なものとの関連に注意しよう。[...]ひとつのロジックが働くのだ。腹は空になる／腹は満たされる。」(Hamon, *Texte et idéologie*, P.U.F., 1984, p. 100.)

のあやまち』で描かれた家畜のお産を除けば、叢書初の分娩の描写であり、作家にとって非常に大きな覚悟が必要だったことは想像に難くない。それゆえゾラは、もっとも性的な魅力に遠い女中を選び、疎外された肉体のおぞましい苦痛を描いたのである。アデルの出産は孤独と恐怖に満ちており、多産や豊饒といったゾラの理想とする家族観とはかけ離れたものである<sup>52</sup>。

赤ん坊は全然泣かなかつたが、心臓は動いていた。男か女か確かめ忘れていたので、アデルは新聞紙を拵げた。女だった。また惨めな女がこの世にひとり！戸口で拾われたルイズみたいに、御者や給仕に弄ばれる肉体だわ！召使たちはまだ眠っていたので、彼女は廊下に出て、一階のグール氏を起こして表玄関の紐を引いて開けてもらった。ショワズル街のパサージュの鉄格子がたまたま開いていたのを幸い、そこをくぐり抜けて道端に包みを捨ててから、再びそつと上に戻った。誰にも会わなかつた。生まれて初めて彼女は幸運に恵まれた<sup>53</sup>！

受動的なアデルが初めて取った積極的な行動は、将来疎外された自分の分身となるであろう、「御者や給仕に弄ばれる肉体」を捨てることだった。最上階から正面玄関、そして再びブルジョワ家庭を通り過ぎて女中部屋に戻る彼女の往復運動は、最終章ですべてのドラマが家屋に封じ込められ、アパルトマンが平穏な初期状態に帰ったことを示す。アデルはラシュェルのように主人に復讐することもなく、ただブルジョワの虚実のすべてをあるがままに戻すことだけを望むのである。アデルが出産した翌日、サロンでは男性たちが私生児を殺した哀れな女工が有罪になった事件を話題にする。最上階の女中と関係をもった男たちさえも、労働者のモラルの退廃を嘆き、裁判官の判決を賞賛する。その「本物の野蛮人ともいうべき墮落した母親<sup>54</sup>」は、かつてグール氏が妊娠に気づき、激昂して追い出した借家人だったことも明らかになる<sup>55</sup>。こうしてブルジョワの悲喜劇は、賑やかな男女の社交、すなわち外に向かつて開かれた「私生活」の場面で閉じられる。

---

<sup>52</sup> これ以後ゾラは、『生きる歓び』では華奢なブルジョワ娘ルイズの帝王切開、『大地』（1887）では頑健な農婦リーズの出産場面を描き、環境によって大きく異なる母性のあり方を提示しつつ、「豊饒と多産」という理想の家族観を模索して行く。

<sup>53</sup> *Pot-Bouille*, p. 371.

<sup>54</sup> *Ibid.*, p. 379.

<sup>55</sup> 物語の結末で重ね合わされる、アデルと名も無き女工の嬰兒殺しは、当時においてことさらスキャンダラスな事件ではなく、むしろ頻発する社会問題であった。「もし不幸な事態に陥ったら、彼女は「どうにかする」のだ。嬰兒殺しの訴追を受けた女たちの中には多くの女中がいた。」 (*Histoire de la vie privée*, p. 184.)

奥様方はちょうど、召使たちのことを話していた。[...] ヴァレリーとベルトはどうしてもまともな娘を雇えなかった。いくら斡旋所に行っても、世間ずれした使用人に次々と台所を荒らされるので、諦めるしかなかった。ジョスラン夫人はアデルをこき下ろし、不潔で馬鹿な出来損ないだと罵ったが、臆にはしなかった。カンパルドン夫人はリザを褒めちぎった。まるで真珠みたいに非の打ち所がなくて、表彰に値する女中のひとりだわ。そして重ねて言った。「あの娘は今では家族の一員ですわ。小さいアンジェールが市役所の講習会に行くときは、リザが付き添いますの…ええ、あの2人なら一日中一緒でも安心よ<sup>56</sup>。」

ベルト、ジョスラン夫人、カンパルドン夫人ら女主人たちはそれぞれ、召使の真の姿に対し妥協をするか、盲目のままであるしかない。こうした受動性は、召使なしでは私生活が保てないブルジョワたちの、不可避の依存を示している。また女中たちも同様に、主人抜きでは存在価値を失ってしまうため、緊張を孕んだ両者の関係は共依存的でもある。しかし召使たちはブルジョワへの屈折した憧れを忘れたかのように、主人の欺瞞をさらに激しく糾弾する。

雪解けでむっとする毒素を放つ暗い溝の底から、召使たちの怨恨が再び立ちこめてきた。2年分の汚れた下着を並べるかのように、色々なことがあげつらわれた。まったくあたしたちはブルジョワに生まれなくてよかったわ、ご主人さまたちは汚れ物に鼻を突っ込んでご満悦なのね、だって懲りずに繰り返すんだもの。[...] 夕食用のヒラメの腸を抜いているジュリーは血まみれの腕をむき出ししていたが、召使の側に来て肘をついた。そして肩をすくめ、哲学的な返事で話を締めくくった。「まあね、お嬢さん！ こっちの家もあっちの家も、結局似たようなあばら屋よ。今のご時世どこでも同じ繰り返し、汚い連中の集まりさ<sup>57</sup>。」

このように作品の最終行では、料理上手で主人に重宝されるジュリーさえも、ブルジョワに対して「どこでも同じ繰り返し」と、醒めた軽蔑を見せている。彼女が腸を抜くヒラメは、暴露話によってむき出しにされたブルジョワの姿と重なるが、同時に出産で腹を空っぽにしたアデルも想起させる。もっとも平凡なアデルさえも、ブルジョワが召使に押し付ける都合のいいファンタスムの告発者となるのである。このように、『ごった煮』で女中が主人に抱く怨恨の深さや告発の苛烈さは、単なる喜劇的效果を超えている。特に女主人とその女中の関係は、秘めた嫉妬や劣等感など男同士の主従には顕れない感情によって変質し、ラシエルのように寡黙で謎めいた性格の女中が無防備な主人への報復行為によって物語自体を転覆させる。19世紀の雑居的な私生

<sup>56</sup> *Pot-Bouille*, p. 377.

<sup>57</sup> *Ibid.*, pp. 385-386.

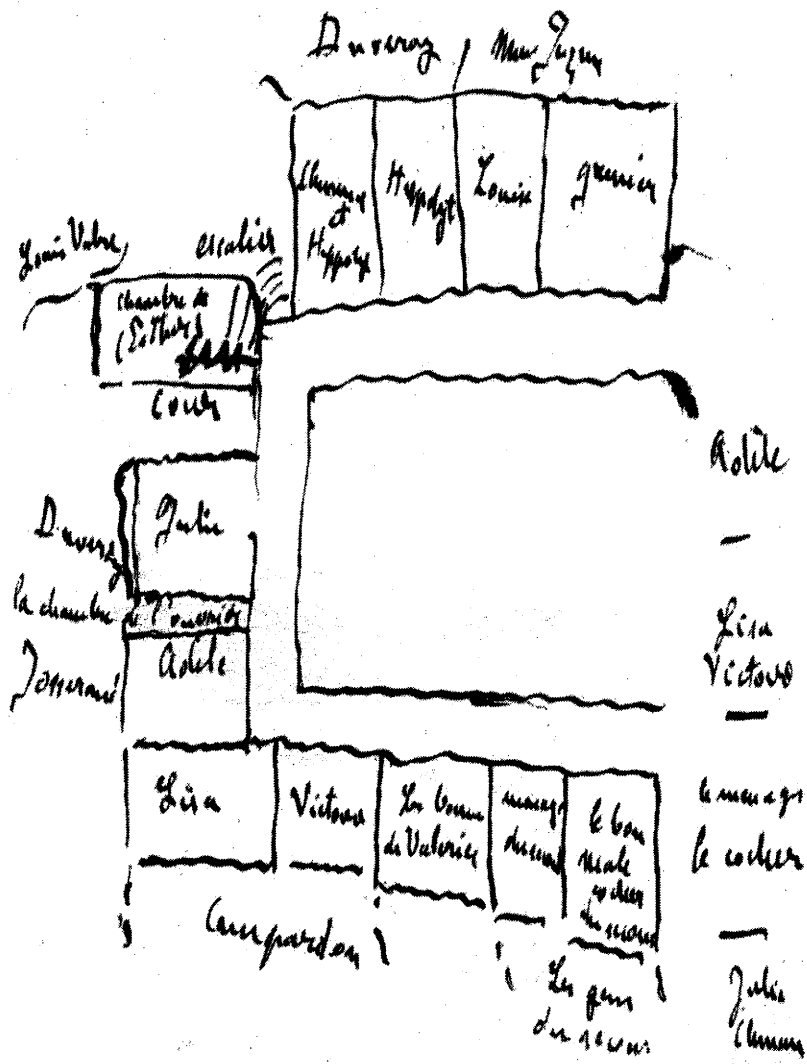
活が孕む危険を、ゾラは『ごった煮』において召使の爆発的な雄弁さによって表したが、女中を主人公に押し上げて語らせるのではなく、主人公側の視点および、その価値観に対するアンチテーゼとして用いたのである。

### おわりに

これまで見てきたように『ごった煮』で選択された、叢書において特異な群像劇という構成は、ブルジョワのアパルトマンという限られた舞台の表裏を、主人とその女中という対照的な視点から描くことを可能にし、きわめて効果的に働いている。主人公の視線に重なり交錯する女中たちの視線は、19世紀特有の二重の「私生活」、すなわち社交的な空間と家族の生活空間を自由に行き来する。こうして社会的なコードに溢れたアパルトマンは、主人と召使が依存しあって家庭生活を営む、一時代を凝縮した小世界として成立するのである。噂話にいそしみ、時に主人を裏切る女中たちは、ことさら卑小に描かれることも、民衆の生命力の象徴として過度に美化されることもない。しかし同じく家庭の観察者である神父や医者が多くが、執拗に自己破壊を繰り返す人間性の前で、諦めや順応を示すのに対し、ステレオタイプを脱却した女中たちは、押し付けられた主従関係に様々な形で異議申し立てを行う。

かくして『ルーゴン=マッカール叢書』の女中たちは、二次的な脇役に甘んじることなく独自の行動理念を備え、家庭の観察と批判によって主人の優位性を突き崩していく。その類型は多様であるが、最終的には主人への復讐をも厭わず、主人公へ異議申し立てを行う存在へと収斂していく。ゾラは『ごった煮』以後、『生きる歓び』では女主人に反抗して自殺するヴェロニクを、『大地』では女中から地主の妻に成り上がるコニェットを、さらに最終巻『パスカル博士』においては、ゾラの分身に等しい主人公パスカルの遺伝研究を火にくべてしまう、独身女中マルティーンヌを創造している。『ごった煮』で謎めいた沈黙を守るラシエルと、諦念の混じった無気力なアデルの両方の性格を踏襲したマルティーンヌは、20巻の小説全体が目指してきた到達点である、ルーゴン=マッカールの家族史をも覆そうとする役割を引き受けるのだ。召使の類型を、労働者階級の風俗を描写する口実としてのみ扱わず、社会システムの中でしたたかに生き伸びる生々しい個人として扱ったこと、さらに同時代の私生活の実態を女中の批判的な視点を借りてさらけ出し、叢書のライトモチーフとして成立させたことから、ゾラが副次的なものに向ける眼差しの鋭さと新しさが理解されるのである。





(fig. 1.) Pot-Bouille, « Les chambres de bonnes »

【図版出典】

Ms. NAF 10.321, f° 394. Voir, Olivier Lumbroso, *L'Invention des lieux, Les Manuscrits et les dessins de Zola*, t. III, Les Éditions Textuel, 2002, p. 419.